

クラス	301	担当教員	江村 和彦
テーマ	「つくる、あそぶ」実践を通して子どもと自分を考える		
著書・論文 研究課題等	<p>著書：（共著）幼児造形の基礎 萌文書林（2018）、（共著）保育者をめざす楽しい造形表現 圭文社（2018）（共著）図画工作科・美術科教育法 建ぱく社（2019）</p> <p>論文：①造形素材としての粘土の特性についての一考察—粉がらつくる焼き物づくりを通して ②保育につながる「場」としてのワークショップ ③感性・創造の授業実践報告 ④陶の立体制作による芸術的省察による一考察～ろくろ成形とひもづくりの混成技法による制作について～⑤キリスト教保育2022年4月号～9月号「粘土あそび」⑥感触を楽しむ</p> <p>造形活動に関する実践的研究Ⅱ—土粘土の素材遊びに見る子どもの姿—2023年5月保育学会</p> <p>研究課題：陶芸制作（色絵磁器の表現方法・動物、恐竜、空想の生き物、ロボットのオブジェ制作）、粘土遊び、地域との連携によるものづくり教育活動、小中学校における美術鑑賞教育活動、アウトサイダーアート、地域での作品制作を通してアート普及活動</p>		
ゼミナール概要			
キーワード：造形あそび、素材体験、幼児造形、図画工作研究、制作、土、陶芸			
<p>目的、内容、方法、授業計画等：</p> <p>造形活動は、直接様々な素材やモノとかかわりながら感じて表す相互作用によって生み出されるものである。子ども達は、様々な環境の中で、五感を通じて創造的な活動を生み出していく。それら環境や素材とのかかわりは、さぐりながら生み出す「さぐる造形」にとって重要であり、私たち自身が子どもたちとともに触れて感じる体験を重ねることが重要である。その体験とは、さまざまな素材に体全体でかかわり、またはさみ、のこぎりや金づちなど道具を用いて、形を変えたり組み合わせたりすることである。造形活動の過程そのものが、想像と思考の過程である。その過程を保障するためにも、自ら様々な事物にふれ、つくり、あそぶことで感じる力を身につけることを目的とする。自分自身で「つくる、あそぶ」を体感し、子どもの「つくる、あそぶ」を通して学ぶことを常に問い続けてほしい。</p> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な造形素材による制作とそれにまつわる道具の理解 ・保育園、幼稚園、施設などでの造形遊び・制作の実践から子どもとの関わりを考える ・造形教育の理解のための美術館、博物館鑑賞活動及びワークショップ研究 ・制作を通して芸術と教育・保育の関わり方考える <p>方法</p> <p>3年次では、さまざまな造形素材に触れて造形遊びを体験する。また保育園、幼稚園・子育て支援センター、障害児通所施設などで造形遊びを通して素材に対する幼児・児童たちの様子を観察する。さらにゼミ生自ら計画を立てて、グループ実践と個の実践（制作）を重ねていく。3年次後半から卒業論文、卒業制作、両面からテーマを決めていく。</p> <p>年に1回程度、美術館や博物館、各種体験施設を訪ね、造形芸術と子どもとの関係について学ぶ。</p> <p>4年次は卒業研究を進めつつ、学外での造形実践を3年生らとともに計画、実践していく。卒業制作は学内展示を予定している。実践、制作には、材料や道具などに費用が掛かる。すべて自費で行うが、費用を抑える工夫や材料の確保の方法について、具体的な実践（制作）を重ねて、さまざまな現場に対応できる力を身につける。</p>			
担当教員からのメッセージ			
<p>★図工や美術の得意、苦手などは、関係ありません。子ども達・児童生徒たちが楽しく過ごす活動のひとつである造形を理解するために、熱意をもって臨んでほしいと考えます。</p> <p>★ゼミ学外活動を夏期・冬期・春期の休み、授業外に行いますので、必ず参加してください。</p> <p>★実践、制作についての材料費などは実費で行うことを念頭においてください。制作については、材料の調達など工夫を楽しむ余裕を持ってください。</p> <p>★自分で考える主体性を持ってください。</p>			